

志賀重昂『日本風景論』における皇天・后土論

— 西南日本の火山記載と台湾補記をめぐって —

米地 文夫*

要 旨 1894年刊行の志賀重昂著『日本風景論』における西南日本の火山に関する記載には、他地域の火山記載と同じく論文等からの剽窃が多いことを指摘するとともに、他地域に比し、歴史的、宗教的記載が多いことを明らかにした。志賀は、さらに台湾の領有（1885年）以後の版には、「今や我皇の版圖は台湾島に擴張して」と書き、風景が火山力という「后土」によって造られ、領有は「皇天」の賦与を受けた「我皇」が行うと説いて、天皇の軍隊の侵略による版図の拡大を正当化したのである。

キーワード 志賀重昂著『日本風景論』、火山、皇天・后土、西南日本、台湾

はじめに

1894年、日清戦争開戦時に刊行された志賀重昂の著書『日本風景論』について、私は批判的立場¹⁾から、これまで『日本風景論』のなかでも中心的な位置を占める火山に関する記載部分を中心に分析を行ってきた。すなわち、『日本風景論』の「日本には火山岩の多々なること」の章のなかの全国の火山について列挙した部分（『日本風景論』初版62～98頁、本稿では各論と呼ぶことにする）について、すでに北日本の火山（米地、1999）、東日本および小笠原列島の火山（米地、2000）、中部日本の火山（米地、2003）のそれぞれに関する記載を取り上げて報告した。

北日本の火山に関する論考においては、志賀がMilne（1886）や神保（1891）の論文から剽窃して火山の記載を行ったことと、それが自国の風景を賛美するための操作だったことを明らかにし、東日本の火山に関する論文では、志賀が火山に国粹的風景を求める発想を菊池安（1889）の論文から得たことなどを明らかにした。また、中部日本の火山については、志賀の愛郷心と愛国心との関係について論じた。

本論文はこれらに引き続き、西南日本の火山に関する志賀の記載をとりあげるとともに、皇天および后土と国土の形成ならびに拡大との関係を志賀がどう捉えたか、という問題、すなわち、天皇とその祖先すなわち皇祖や古来の国つ神を、日本や当時の新領土の景観と、どのように結び付けたのかについて論ずる。

I 『日本風景論』における火山記載とナショナリズム

志賀重昂の『日本風景論』について「自然の客観的観察とその叙述を最も組織的に展開した」と述べたのは鈴木（1995）である。彼はこの志賀の書を「地理学的な記述の書」で、その記述は「ステイト・ナショナリズムとともにあった」とした。そして「火山が多いことは、日本の国土が男性的であり、雄々しい、などとした志賀のそれは明治期日本のナショナリズム、弱小国家が帝国主義に抗して立ち上がるという時期の思想表現である」という。

志賀の記述が、鈴木のような「客観的観察とその叙述」といえるかどうかには、問題が残るが、「組織的に展開」を目指したということは確かである。

* 岩手県立大学総合政策学部 〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字菓子152-52

あろう。志賀は『日本風景論』において日本の全火山の記載を組織的に展開しようと試みたのである²⁾。志賀のナショナリズムが日本が火山国であるとしたことと固く結び付いていることもまた、間違いないことであろう。ただし『日本風景論』は「弱小国家が帝国主義に抗して立ち上がるという時期」の思想表現というよりは、さらに進んで「強大な国家となって弱小国家を支配する帝国主義に列するために立ち上がるという時期」の思想表現であると私は考える。

志賀は『日本風景論』の「日本には火山岩の多々なること」の章のなかで日本の火山を列挙し、それぞれを説明したあとに、こう述べている。

「火山の日本國に普遍する此の如し、想ふ火山は天地間の『大』なる者、天地間の『大』なる者にして日本國に普遍する此の如しとせば、浩浩たる造化がその大工の極を日本に錘めたりと断定する、誰か之れを僭越なりと言うぞ」。

火山が日本の国土に普遍的に分布することを、このように志賀は誇らしげに述べた。ところが、西日本は東日本に比し、火山の数も研究論文も少なかった。その西日本にも火山が普遍的に分布することを示し、それらの火山に解説を加えるために、志賀がどのような操作を行ったか、台湾の領有に歓喜し、さらなるアジア各地への進出、侵略を唱導するために、どう記述したか、志賀は国土をどのような空間認識で捉えていたか、という3点が本論文の主題である。

3点目、すなわち志賀の空間認識については、『日本風景論』「日本には火山岩の多々なること」の章と、同書巻末近くの「日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」という章との関連について考察した。その結果、志賀の火山列挙の目的、方法が、彼の意識の中の「皇天后土」という空間認識と深く関わることを、明らかにした。

『日本風景論』について、近代史家佐藤能丸(1998)は、次のように寸評する。「日本の風景美に対する観念(美意識)の革命を促した明治期有数のロング・セラー書」。さらにこう述べる。「明治中期の日本美再発見の旗手たちは、強烈なナショナリズムの発想から、近代の眼を通じて、自覚されない伝統美を掘り起こそうとした。志賀もまた、景観美を国民共有のものへと鼓吹することによって、日本人の精神のおよび心情的な紐帯を求めようとした。」

この佐藤による志賀の位置づけは、おおむね妥当と言い得るであろう。しかしながら、明治政府が国民の精神および心情の極めて強力な紐帯としたのは、天皇の臣民としての忠誠心であった。そのこととの関わりを抜きにして、志賀の全体像は把握できないであろう。志賀も天皇の統べる国土という認識を、景観美の称揚の根底に蔵していたのであった。

II 西南日本の火山に関する記載

II-1 中国・四国地方の火山に関する記載

1. 船上山

本来なら大山山頂から北東へ伸びる山脚上の一峰である船上山が、なぜ独立の一項目となったかは、白山火山脈全体の記事のなかに「名和長年勤王の史蹟たる船上山」とあることから明瞭である。各論においても、次のように書かれている。

海拔九七四米突、名和長年の後醍醐天皇を奉じて勤王の兵を挙げたる所、想ひ起す義人萬斛の鮮血濺ぎて磊落たる火山岩を染めたる事を。

文中には、海拔高度と火山岩の文字を除けば、歴史的記事しか書かれていない。逆にいえば、歴史を書きたいために名和長年³⁾の挙兵の地船上山を独立させたのである。勤王家の歴史と火山岩という取り合わせは奇妙にみえるが、志賀はローマ帝国は火山岩の上に建ち、シーザーは火山岩の上に生まれ、欧州の英雄偉人、例えばダンテ、コ

ロンブス、ガリレオらが火山岩の間に成長した、という奇妙な説明を大真面目で『日本風景論』の中に書いている。日本においても、火山岩が歴史的英雄、それも明治の日本に繋がる勤王家の登場を、火山ないし火山岩地域と結び付けたかったのである。

2. 大山

伯耆富士という異名をもち、中国地方の最高峰である大山については、山の大きさや信仰の篤さの割には短い記載があるのみである。『日本風景論』初版には5行の記載があり、同じく15版を底本とした岩波文庫版に至るまで内容は全く変わっていない。

『日本風景論』初版における他の中部～西南日本の火山の各論行数と比較してみると、富士山の32行は別格としても、立山23行、白山24行、阿蘇山26行、霧島山35行、雲仙（温泉）岳19行などは大きく差をつけられている。

おそらくは、参照すべき資料や文献が得られず、志賀自身もあまり良く知らない山であったからであろう。当時知られていた日本の全火山をすべて記載したいと考えた志賀は、火山によって記述の粗密があっても仕方がないと、拙速を選んだのである。

3. 三瓶山

この火山に関する記載は『日本風景論』初版と岩波文庫版では大きく違っている。初版では、その地理的位置を記したほかに、こう書かれている。

海拔一、一七三米突、薺整なる圓錐躰をなす、火口あり、径路は嶮峻なりと雖も、絶頂よりは前に日本海を望み背に無数の山嶽を看る

初版段階では志賀が入手できた三瓶山に関する科学的資料としては、僅かに Milne (1886) の表の“Cone and crater”という簡単な記載しか無かったため、このような簡略な記載になっている。

しかし、のちの版、例えば岩波文庫版では、地理的位置も詳しくなり、海拔高度も1,228mと改訂され、各論本文にあたる文は次のように始まる。

男三瓶、女三瓶、孫三瓶、外輪山をなし、その間に旧火口（室の内と里称す）あり、周回二十町、深所は一反余歩の池となる。池より西北二町、「鳥の地獄」あり、炭酸噴孔にして鳥類此所に到りて斃る、火口より東南下する五町、熱泉湧出す、（後略）

岩波文庫版の各論は、初版の約60字から約180字と三倍になった。初版の中でほぼ残ったのは「絶頂よりは前に日本海を望み背に無数の山嶽を看る」の部分のみであるが、「絶頂よりは前に日本海、隠岐島を望み」と補記している。その名の由来となった三つの瓶を伏せたような形態は、初版からはわからないが、岩波文庫版でようやく理解⁴⁾できる。志賀は初版刊行後も、資料の収集を続け、補訂していたことがわかる。大急ぎで執筆した初版の弱点を志賀はやはり意識していたのである。

4. 伊豫ノ小富士・高縄山・石鎚山・飯ノ山

現在の知見では、四国には火山はない。しかしながら火山岩の山はある。志賀が「南日本の火山」として四つの火山脈をあげ、その一つを阿蘇山火山脈とし、九州の阿蘇から久住山などを連ね、四国、紀伊半島を経て、三河の鳳来寺山に至るものを紹介した。この火山脈を志賀は重視したが、それは、彼の故郷三河にも火山脈が達していることを記載したかったためである（米地、2003）。

火山脈の存在そのものが否定された現在からみた批判は、この場合必要なことではない。志賀は当時の学界の情報を基に、この火山脈の記載を行ったことは、当時としては間違っていない。また、飯ノ山（讃岐富士）のような、火山岩からなるものの、火山とはいえない侵蝕地形の山も当時は火山とされていたので、記載をするのは誤りとはいえない。

ここで問題にしたい点は、志賀が四国全土から取り上げた全て、すなわち伊豫ノ小富士・高縄山・石鎚山・飯ノ山に関する記載の短さと内容の問題である。ここには伊豫ノ小富士と飯ノ山についての記載を掲げてみる。

伊豫ノ小富士 伊豫興居島の南部

火山質蛮岩より組成す。その形鍋を伏せたる如く富士山と大に殊異す。

飯ノ山 讃岐鶴足郡東南部、丸亀の東南に聳ゆ

海拔五六五米突、一名讃岐富士、頂よりは土器川の全溪谷、丸亀の旧城楼、瀬戸内海の群島を望み、芸備の諸嶺を雲煙杳渺の間に認無。

他の二山も、飯ノ山とほぼ同字数であり、四山でわずか11行しか書かれていない。これらの山々に関して依拠すべき科学的論文ないし書籍がなかったためである。

にもかかわらず、九州から本州へ（特にそのなかの三河に）繋ぐために、四国の山を抜くわけにはいかなかったのである。そのため、この阿蘇山火山脈の総論的記載においても、九州の彦山や耶馬溪の次に、「讃州儒子の「噫悲峰」と雅称する処（飯ノ山）」が入り、本州の室生山、鳳来寺山と続けているのである。

一般に、『日本風景論』における南西日本の火山の記載には、自然科学的記載に加えて、歴史的な記述が多い。その理由は、志賀が依拠する自然科学的論文等が北東日本に比し少なかったためであることのほかに、火山と歴史との関わりを述べ、後述する皇天・后土論のような空間認識を志賀が有していたこともあげられよう。

また、志賀が『日本風景論』において各地域の火山脈に付けた寸評的短文をみても、南西日本の火山について歴史との関わりを重視していることがわかる。

II-2 九州地方の火山に関する記載

1. 雲仙岳

雲仙岳（志賀は温泉嶽と書き「うんぜんだけ」と読ませている）の記載も“Handbook”の記事に拠っている。“Handbook”とは、1881年にロンドンで刊行されたE.M.SatowとA. G.S.Hawesの共著である“Handbook for Travellers in Central & Northern Japan”のことである。私は“Handbook”の初版は未見であるが、1884年に出た第2版（東北大学図書館蔵）を参照し、さらにこの第2版を翻訳した庄田元男の訳本（1996）も用いて『日本風景論』と比較した。

“Handbook”は本来のタイトルが示すように、日本の中部および北部についての旅行案内書であった。したがって日本の南西部については記事が少なく、志賀は困ったことであろうが、この雲仙岳の記事は載っていたので、彼はこれを十分に活用した。サトウら（庄田訳）の文と『日本風景論』の記載を比較してみる。

志賀 頂に垂直線状なる岩柱あり、高さ八間余、その北面は日光より隠蔽せられ十一月早く氷柱の懸るを見る、頂より四望せんか、北には筑紫海を隔てて筑後川の平原、肥前の群嶺双眸の内に入り来り、東には熊本の平原、阿蘇の火山彙を眺め、東南に霧島火山彙を看、南は眼下に天草の群島瑠璃一碧上に点綴し、西に長崎の諸海角を隔てて遙かに五島列島を認め、眼界豁達にして山海を掌上に弄し、九州半面の景象躍然として眉端に集る。その観光無限。

サトウら（庄田訳）頂には高さ五十フィートの断崖のような岩があり日光を遮られた北面には十一月になると時折氷柱が見受けられる。この峰からの眺望が最も広大で一方には肥後、薩摩から五島列島までを見渡し、他方には高くそびえる阿蘇山、霧島山の頂や無数の入江と大小様々の島が織りなすパノラマの美しさはたとえようもない。

志賀の文の最初の部分は、ほとんどサトウらの訳そのものである。半ば以降は、サトウらの文に地図などから補足して美文としたものらしい。なお、サトウらの文には、上記に加えて1792年のいわゆる島原大變の眉山大崩壊で形成された滑落崖の景観の記載があり、災害についても島原の町の一部を埋め、湾に多くの小島を造ったことにまで言及しているのに、志賀の『日本風景論』は、この災害については全く触れていない。

2. 阿蘇山

阿蘇山の記事は鈴木（1889）やミルンMilne（1886）の論文を参考にして書いている。

阿蘇のカルデラ内の人口について志賀が「無慮四萬の生靈を衣食せしむ」とした（講談社文庫版の「四百」は誤植であろう）のは、鈴木（1889）の阿蘇に関する論文に「三万七千の生靈を括囊せり」とあるのを真似ている。「生靈」などという言葉は『日本風景論』の他の箇所にはなく、ここにも志賀の安易な模倣がみられる。

なぜ四万にしたのかという疑問が残るが、恐らくはミルンによるカルデラ内の推定人口4,000人（この数字も誤植の疑いはあるが）の桁を見誤って、鈴木の数値を変えたのであろう。なおミルンは、阿蘇火口内の人口を、1880年4月の日本地震学会の講演では、10,000ないし15,000人と述べている。

阿蘇については他にも、志賀がミルンの記載も素材として用いたことが明らかな箇所が多く、例えば、ミルンは、西山麓から緩やかな阿蘇の外輪山の斜面を登って、Futaiyai no tôge（綴りは原文のまま、二重峠を指す）に達したとき、視界が開け、足下に急な崖があることに驚いた、という記載を紀行文風にこう書いている。

“...here before us there was a view which was as striking as it was unexpected. Because the ascent had been so long and gentle we naturally expected an equally gentle descent upon the other side, but

instead found that we had reached the edge of what was nothing more than a deep pit, circular in form and with perpendicular sides.”

この英文を志賀は、「緩慢なる峠を登り最高点（二重嶺）に達するや、圖らざりき人は眼前に峭絶なる懸崖を看自から其上に立ち居ることを、是れ阿蘇火山の外輪に達したるが故のみ」と名訳？して、あたかも自分の実見談のように記している。ミルンが科学者らしく緻密な描写をしているのに対して、志賀は簡明でリズムのよい文にし、臨場感を高めている。

このあと急斜面（about 600 feet、志賀は凡そ二百米突と書き換えている）を下る道については、by a zig-zag path way とミルンが書いた箇所を、そのまま「屈曲線的の道路を経て此の懸崖（高さ凡そ二百米突）を下り」と、意味の分かりにくい表現の直訳をしている。

ジグザグという表現は何度も左右交互に折れ曲がっていることを指すのであるから、大きく一度曲がっただけでも、あるいは左右いずれかの方向に片寄って何度も曲がっていても使える「屈曲線的」という表現は不適切である。日本にも古来つづら折りなどという表現があるのであるから、それを使うべきであったろう。凡そ二百米突とあるのは原文の 600 feet を換算したものである。

3. 霧島山

霧島山の場合も山頂からの眺望の記事は、米地（2003）が指摘した浅間山の場合と同じく『日本風景論』刊行の2年前の地学雑誌中の論文に依拠している。その中島（1892）論文のほかにも参照した著作はあったらしいが、核心ともいべき韓国嶽山頂からの景観については、全面的に中島論文に拠っている。

志賀 絶頂に達して四望せんか、東に富士山状の夷守嶽、丸岡嶽迫り来り、二嶽の麓に大畑池、空池、枇杷池の三火口湖あり、東

南に矢嶽、龍王嶽、新燃鉢、中嶽を看、三角形なる高千穂の峯嶺其上に挺立し… (後略)

中島 此山頂ヨリ伏シテ他山ヲ四顧スレハ東面ニ富士形ニ孤立スル夷守嶽、丸岡嶽、環状ノ火口湖タル大畑池、稍々圓形ヨリ引伸シタル空池、琵琶池ノ噴火孔、龍王鉢ノ火孔ヲ負フ龍王嶽、西面ニ富士形ヲ現ハス矢嶽アリ、東南ノ方位ニ新燃鉢、中嶽、御鉢ヲ越ヘ遠ク三角形ニ突出スル高千穂峯… (後略)

志賀は中島の富士形や三角形などの景観表現をそのまま用いているが、中島の矢岳に関する記載が不正確であることを正している点は評価できる。この点は中島が論文中に示した略地図の中の位置関係から、志賀が気が付いたものであろう。

しかしながら、東南方の景観については、中島が「新燃鉢、中嶽、御鉢ヲ越ヘ遠ク三角形ニ突出スル高千穂峯」と書いているのを、志賀は「…新燃鉢、中嶽を看、三角形なる高千穂の峯嶺其上に挺立」と書き換えている。中島が近くの新燃鉢などと遠くの高千穂との遠近の関係を明示しているのに対し、志賀は新燃鉢と高千穂とを上下の関係としたため、実際にどんな景観になっているのかは、わかりにくくしてしまったのである。

4. 桜島

桜島については、その挿図と解説を取り上げて検討してみよう。初版には桜島の図は挿入されていなかった。しかし、のちの版で一時、火山各論の最後、桜島を含む霧島山火山脈⁵⁾の記事の間に、その図が挿入されたことは、講談社学芸文庫版からわかる。同書の挿図「桜島」には鹿児島城内から望んだ鹿児島湾と桜島、鳥島、沖小島などが描かれており、説明文は次の通りである。

沖小島、鳥島、袴腰半島、みな島津氏の頃砲台あり文久三年七月二日三日英国艦隊来襲

のさい三砲台よく戦いついに英艦を走らす

と、火山としての形態や噴火史などについては一言も触れず、もっぱら幕末の薩英戦争についてのみ書かれているのは、誠に奇妙である。実はこの講談社学術文庫版は全集版を底本とし、原著第三版を参照したもので、第三版は1895(明治28)年3月に刊行されている。この年は4月に清国との講和が成った。志賀も国民も戦勝に歓喜する最中の増刷であり、桜島火山周辺に拠って外敵を撃退したこと⁶⁾を特記したかったのである。

この挿図を描いた樋畑雪湖は、初版になかった図を急ぎ追加している。この桜島の図には「雪湖」と署名があるが、ほかに「雪湖写」と記した絵もある。霧島火山を描いたものもその例であり、谷文晁の『名山図絵』中の図をリライトしたものである。火山以外にも、西日本の山としては五剣山、東日本では小野岳が谷文晁の絵の模写である。

『日本風景論』のなかの火山の図には地域的偏りが大きく、例えば折り込みの「日本の火山」という、この書の代表的な図版には、千島列島の火山の図が19図で横山図がうち15図、ミルン図が4図、収められている。折り込みの図の他の火山は皆ミルンの図で、北海道の火山は8図、東北が4図、男体山と富士山、伊豆の島々など5図があり、東日本は計36図に達する。

それに対して、西日本はわずかに2図で、ミルンの描いた阿蘇山と温泉(雲仙)岳があるのみであった。ミルンの名は伏せて、日本人の書いたものには名を出すという方法が、日本人による日本風景の科学的発見を装う操作であることは、すでに指摘(米地、1999)したが、火山の図の地域的なアンバランスは、解消するのは困難であった。そこで雪湖に現地で、もしくは写真や絵画の模写で、大急ぎで加えてもらったのが、桜島や霧島山なのである。

5. 開聞岳

九州最南端の開聞岳については、参照する資料

が少なかったらしく、志賀は位置を説明する短文の下に次の短い記載をしたにとどまる。

海拔九二七米突、一名薩摩富士、開聞海角より峭然と突立し、秀絶なる富士山をなす。頂よりは琉球洋の群島を雙眸に収め雄大真に絶雙

しかし、霧島山火山脈の総論では「我皇版圖の南門に富士山を代表する開聞嶽あり」と述べ、桜島の各論の中の桜島の項には山頂からの景観のなかに「東南に秀絶なる富士山状の開聞嶽を眺め」とある。また他の箇所には「薩摩富士」（薩摩開聞嶽）としたり、読み人知らずの「薩摩かた頼娃郡なるうつね島これや筑紫の富士といふらん」という歌を開聞岳を詠んだものとして紹介したりもしている。

要するに富士山の名が頻出しているのである。当時領有していた千島から、北海道、本州東北部と続く北東日本には富士山型の成層火山が多いが、西南日本には少ない。すなわち、志賀の「富士山を岱宗とし」て富士山に似た山々を従えるという、いわば《一君万民》の山岳版ともいべき《一つの岱宗富士山と多くの〇〇富士》という見方に、西南日本はあまり適合しないのである。

そこで希少価値ともいべき開聞岳の富士山状の姿を強調することになったのである。さらに「我皇版圖の南門に」とあるのは、開聞岳が音を同じくする別名海門岳とも称するので、それに掛けている記述である。しかしながら、当時の日本の南端ではないものの、南進論者の先駆けとも言われることのある志賀らしく、天皇のもと版圖を拡大して富士山を海外各地に造るための出陣の門のような感じで用いたとも考えられる。

志賀が世に知られたのは『南洋時事』（1887）の上梓によってであり、爾後、彼は南進論の旗手とみなされていた。「我皇版圖」を南方に拡張したいという彼の意図が、「南門」という表現にこめられている。

II-3 南西諸島の火山に関する記載

南門の南にもさらに火山はある。しかし、これらについては志賀はほとんど情報を得られなかったらしい。それにも拘わらず、日本に火山が「普遍的に」あることを説くためには、志賀は無理を承知で記載しなければならなかった。

そこでまず霧島山火山脈の総論では、「是れ沖繩列島の鳥島に起り、東北走して河邊七島（寶島、平島、悪石島、臥蛇島、諏訪ノ瀬島、中ノ島、口ノ島）、硫黄島を経、九州に入り…」と始まるが、この鳥島（硫黄鳥島）については、上のように名は挙げられているが、各論中には記載がない。

河邊七島（吐噶喇列島）については、それぞれについて記載があるので、最初の三島のみを掲げてみる。

寶島	鹿兒島の西南百十湊 全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放
平島	鹿兒島の西南八七湊 全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放
悪石島	鹿兒島の西南九六湊 全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放

見てのとおり、単に鹿兒島からの距離の数字が違っただけで、他は全く同文である。さらに他の4島も同様であるばかりか、続く口ノ永良部島と硫黄島も同じである。

これらは一島一行で書かれているから、寶島から硫黄島まで九島を説明する九行が全て「鹿兒島の西南…湊 全島火山岩より組成す、海岸は火山岩崖壁立、潮勢猛劇、景物豪放」と同文を並べて書かれている。

名文家といわれる志賀らしくもない無造作な記載であるが、志賀の狙いは日本の隅々まで火山が普遍的にあることを示したいと考えたために、やむを得ない書き方となった。

当時の日本の北東隅であった千島列島については、『日本風景論』には、そのなかの主要19島それぞれについて個別に火山の記載がある。南西隅の島々についても志賀は同様に書きたかったであろう。しかしながら千島の場合は横山(1894)やミルン Milne (1886)の論文があり、具体的に各島の火山の記載がなされていたが、南西諸島についてはそれが無かったため、どの島も火山岩からなることを唯一の手掛かりに上記の文を書いたのである。

Ⅲ 台湾の風景に関する記載

台湾については、その領有が1885(明治28)年に決してから6版(第六版、明治29年6月刊行以降)に「台湾の風景」という一文が加えられた。現在、入手しやすい岩波文庫版『日本風景論』などは、追加後のものである。台湾領有は南進論者の志賀にとっては欣快に耐えないことであったが、その台湾についての記事を挿入する場所を決めるのに苦労したにちがいない。

日本の風景美を讃え、他国、特に近隣諸国の風景を酷評するという内容で読者を興奮させた『日本風景論』に、台湾の風景のみを優れているとする文を加えることは難しいからである。

志賀はそこで志賀一流の驚くような荒業をやったのける。台湾の記事を、なんと「日本風景の保護」という章中に加えたのである。「日本風景の保護」の内容は、『日本風景論』の一見、科学的、近代的な風景観の提示にみえる内容とは逆に、「文明開化」により失われつつある名所旧跡の保護を主張するものである。この章は、全9章中、短い方から二番目で、最長の章「日本には火山岩の多々なる事」の1%にも達していなかった。さらに、他の和歌や俳句、漢詩などを引用した部分を抜き、志賀自身のオリジナルな文の長さで比較すると、この章が最も短くなるのであった。

この「日本風景の保護」の箇所をもって、志賀は景観保護思想の先駆者であるという賛辞を受けることがあるが、刊行当時、この箇所は注目されなかったし、引用した詩歌の月並みさ、例えば

「宮城野に大根植てへらしけり」という引用句などにみるように、読者を説得するに足る内容とは言い難かった。むしろ『日本風景論』の一見科学的な記載に当惑し、忌避しようとする旧感覚の読者へのエクスキューズという性格が濃い章であった。

志賀自身、この章の短さ、内容の浅さが気になっていたのであろう。そこで、新たに獲得した領土台湾の風景の紹介をここに挿入することにしたのである。

日本の風景の保護を訴える文と、新たに日本が領土とした地域の風景の紹介を結び付けるために、志賀は独特の論理を用いた。もちろん、台湾は亜熱帯の風景で、日本とは大きな違いがあるが、志賀は「その土壌の大抵は膏腴なる火山質たり」と書き、「火山岩の磊落峭拔して洋水の怒激浸蝕する處、宛として日本版圖の内の地」と述べ、火山質の土壌や火山岩のある点で、大陸とは異なり、日本の領土となるに相応しいとしている。

また、谷文晁が生き返ったら、台湾を好画題としたらうなどと架空のことさえ述べて、日本風景のなかに加える妥当性を示そうとしている。「日本風景の保護」と「台湾の風景」という異質のものの中に、何らかの繋がりがあるかのようにみせるための苦心の記述であった。

台湾に関する記事は、その前の章「日本の文人、詞客、画師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」にも、第六版以降、「今や我皇の版圖は臺灣島に擴張して、熱帯圏裡の景象は、新に日本の風景中に加入し来り」云々とある。ここで日本の版圖と言わず、我皇の版圖としたことに、私は注目している。その理由は「皇天」と関わるからであり、日本の領土は、日本が拓げるのではなく、我皇が「皇天」の賦与を受けて拓げるものである、と志賀は考えたのである。

台湾の風景は、火山力という「后土」によって造られ、領有は「皇天」の賦与を受けた「我皇」が行ったという、この志賀の考え方の根本については、次節において詳述する。

IV 「皇天」と「后土」の問題

IV-1 高千穂峰と富士山

志賀は『日本風景論』において名山中の最名山として富士山を挙げ、これを全世界「名山」の標準と呼ぶ。

そこで微妙な取り扱いになるのが高千穂峰である。天孫降臨の地としての高千穂の地の比定には二つの説がある(千田、1999)⁷⁾が、志賀は霧島山の高千穂峰と考えていた。神話の聖地高千穂峰は富士山とは異なり、志賀は名山とは書いていない。

『日本風景論』で志賀は、霧島火山脈について述べるなかに「日本有史期の最故趾たる高千穂峰あり」と書き、霧島山の項のなかの記載には高千穂の山頂について「頂に所謂神代の靈物『天の瓊矛』立つ」と記し、その形状や大きさについて詳しく述べて、「真に奇物たり」と結んでいる。

「所謂」とか「奇物」などという表現は、志賀がこの「天の瓊矛」には、疑念ないしは奇異の念を持っていることを暗示している。そもそも国生みの神話で登場する「天の瓊矛(あめのぬひこ)」が天孫降臨の地に存在するのはおかしい。千田(1999)も述べているように、この「矛」はもちろん後世の作であるが、志賀は神代の靈物として、肯定とも疑問ともとれるような詳説をしている。後述するように「須らく此山に登臨して太奇を探らん哉」というその「太奇」とは、日本の根源に関わる摩訶不思議さなのかもしれない。

志賀は日本の最故趾と高千穂峰を位置づけているので、この神代の靈物を全面否定したくはなかったであろう。志賀が高千穂峰を天孫降臨の地として認識していたことは、そのことに因む古歌を取り上げていることからわかる。すなわち、日本の火山は古来歌人に好まれてきたとして、古歌を連ねて略地図的に配置した「別表」なるものが挿入されているが、その古歌で繋ぐ火山脈まがいの連鎖の南西の端には高千穂峯があり、「くしふるの山にかすめる春の雨/天つうらよりくたるとうみる 元長」とある。

志賀が、高千穂峰を日本の最も重要な山と位置づけなかった背景には、徳川ゆかりの地三河の岡崎藩士の末裔をもって自負する彼にとって、高千穂峰が旧島津領にあることも関わりがあるかもしれない。

一方、志賀は富士山については、「聴け、此山に對する世界の嘆聲を」と、日本人以外の人々からの賛辞を上げているが、その真っ先にこう書いている。

「富士」は蝦夷語「火の女主(フジ)」より由来す、以て太古蝦夷人が此山を崇拜し且つ愛慕したるを知る。

つまり、志賀は富士山の位置はかつては蝦夷人が住む土地であったとしている⁸⁾。日本民族の神話的故地というべき高千穂峰と、蝦夷(志賀はアイヌ民族をも蝦夷と呼んでいた)の地であった富士山とを、志賀はどのように考えていたかは、次節以下において「皇天后土」と関わらせて論じたい。

IV-2 「皇天」と「后土」の性格

1. 「后土」について

「后土」(こうど)とは土地の神のことである。「后」という字の第一義は王や皇と同義で、中国では一般にこの意味に用いる。しかし、日本では第二義の「きさき」の意に用いることが多く、その場合は女神、地母神であるからで、男神である天の皇と対になる神となる。

志賀は「后土」の語を多用している。立山火山脈については、「想ふ后土の大活力、日本本州中部の地骨たる大花崗岩帯を破りて迸発し、立山火山脈を聳出す」とあり、霧島山については「后土の大活力を認識し以て君が胸宇を宏恢し以て君が意気を豪爽ならしめんとせば須らく此山に登臨して太奇を探らん哉」とある。千島列島の火山についての記載にも、「后土の大活力、その胸腹より発し、爆然として撃き起こしたるものを千島列島となす」と始まる。

他の箇所では「自然の大活力」とも言っており、この場合は「后土」と「自然」とはほぼ同じニュアンスであるが、「后土」は胸腹を持つ擬人的姿で、かつ神性を帯びたものとして用いられている。

さらに火山力一般について「焉ぞ知らんや、火山力の爆裂あるなげんか、太地に凹凸なく起伏なく」と仮定し、その際は「上天茫茫、后土冥々」となるが、火山力のあるために「后土愈々跌宕を恢弘」するという。この場合は、大地になんらかの聖性を付与した表現なのである。この場合は「上天」と「后土」とが対になっているが、「上天」は次節で述べる「皇天」（こうてん）とは異なるニュアンスで用いられている。「皇天」が天皇に連なる日本の天の神であるのに対し、「上天」は天の神一般を指す。

2. 「皇天」について

「后土」は通常は「皇天后土」（こうてんこうど）として、「皇天」の語と対になる。皇天とは天の神であり、上帝や天帝といった漢民族の生み出した聖なる存在ではあるが、志賀は特に日本の天つ神を指すものとして用いている。

「皇天后土」は「天神地祇」と同義、すなわち天の神と地の神のことである。これはまた日本では天つ神と国つ神を指す。国つ神は出雲の神のような天孫降臨以前からの土着の神々であり、天つ神は高天が原にいる神なのである。

高千穂に天孫が降臨し、やがて神武東征があつて、「皇天」の子孫である天皇の勢力が、土着の「后土」とその土地の人々を次々に従えてゆき、日本列島を征服、支配したという神話があつた。これを日本人は、明治期～1945年の間、教え込まれており、志賀もまた例外ではなかったであろう。

「皇天」の語は『日本風景論』巻末近くの「日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」という章に登場する。その前の章とこの章の前半まで、この書を書かれた当時の日本の国土、すなわち本州、四国、九州、琉球列島に北海道と千島列島など加えた範囲について論じたあとに、志賀はこう書く。

「既に日本の江山洵美を盡述す、而して是に到り感慨に禁へざるものあるを如何」すなわち日本の風景の美しさについては書き尽くしたが、まだ気持ちの納まらないものがある、といい、さらに「蓋し皇天のこの洵美なる國土を日本民族に賜與するや、更に今日より大なるものありき」と前置きし、岡本章庵のサハリン島に触れた漢詩を載せ、「夫の樺太島を失ひたる即ち是れ」という。つまり「皇天」すなわち天の神が日本民族に与えてくれたはずのサハリンを失ったことを嘆くのである。

この場合の「皇天」は単なる天の神ではない。「皇天」は、日本の「天皇」の祖先、すなわち皇祖が「皇天」であるとともに、その末裔であるとする当代の「皇」すなわち「大日本帝国天皇」を守るものとしての「天」をも意味している。

このすぐ後に続く文は、「然れども我皇の版圖にして臺灣島に擴張せば」などと、「我皇」（わがすめらぎ）が頻出する。「皇天」も「我皇」もこの章後半に初めて登場し、この章にのみ記載される。そして台湾や中国本土などへの「我皇の版圖」の拡張により、『日本風景論』の取り上げる地域が拡大することを無邪気に期待する文となっているのである。その期待どおりになったあとの第六版や岩波文庫版では、「今や我皇の版圖は臺灣島に擴張して、熱帯圏裡の景象は、新に日本の風景中に加入し来り」と改訂している。

同じく、初版では「而して是に到り、感慨に禁へざるものあるを如何、蓋し皇天のこの洵美なる國土を日本民族に賜與するや、更に今日より大なるものありき」とある部分は、のちの版、例えば第六版では「是に到り、感に禁へざるものあり、始め皇天の洵美なる國土を日本民族に賜與するや、更に今日より大なるものあり」と変えられている。

一見、些細な改訂のようにみえるが、前者がやや冗長かつ慨嘆する文であるのに対し、後者では簡明になっている。すなわち、初版段階では新領土の獲得前で国土の縮小を嘆じたのみであったのが、かつて失ったものの代わりに他の新領土を得

た段階で書かれた後者においては、詠嘆調は薄れたのである。

このような『日本風景論』における皇天の捉え方は、いつ、志賀の胸中に成立したのであろうか。私は、それは意外に新しかったと考えている。なぜならば、1889（明治22）年に志賀が上梓した『地理学講義』においては「吁嗟富士の峯、琵琶の湖。美なる邦土なる哉、斯る山、斯る水、上帝豈に偶然に日本人民に附与せんや」と書いている。志賀はいまだ「皇天」を用いず、「上帝」という中国風の創造主を登場させている⁹⁾。なお、富士山と琵琶湖の対のかたちからも、まだ志賀が富士山を唯一最高のものとする発想に至っていないことがわかる。

『日本風景論』においては、かつて富士と並べ、「斯る水」と取り上げて「美なる邦土」の代表とした琵琶湖については、ほとんど触れていない。わずかに「畿内の花崗岩」の節に竹生島があり、5行を割いて、奇観多く眺望も良い、とあるが、琵琶湖そのものについての記載は「湖水の浸蝕」において、湖岸の堆積や侵蝕に触れているものの、琵琶湖の風景を賞する文言は皆無に近い。志賀は、富士山に頂点としての特別な地位を与えるためと、琵琶湖の土が富士として盛り上げられたという俗説の否定のため、琵琶湖にはほとんど触れないことにしてしまったのである。

3. 「皇天后土」という語彙の背景

志賀がなぜ、科学的装いを凝らしたはずの『日本風景論』に、「皇天后土」というような神話的な語彙を用いたのであろうか。

まず、天つ神、国つ神という大和言葉を用いず、漢文的な「皇天后土」を用いたのはなぜか、を考えてみよう。志賀が漢文をよくし、漢文的語彙のもつ直裁的な力強さを用いて、当時の読者層にアピールしていたため、漢語の「皇天后土」を使ったと考えられる。それは読者の豪快な筆者志賀のイメージと合致するものであったが、反面、中国古典の上帝と皇天との区別がつきにくい、などの難点をも伴った。

また大和言葉による国つ神への信仰を特徴とする神道系の新宗教、天理教、金光教、大本教などが、幕末から明治にかけての変革期につぎつぎに誕生しており（上田、2001）、これらと一線を画す意味もあったと思われる。

これらの神道系の新宗教の「開祖たちの神観や教理は、天つ神の世界にはない。むしろ国つ神の世界に生きる。それらは天皇制神話と異なった独自の要素にみちていた。」（上田、2001）のである。それに対して、志賀の「皇天后土」論は、日本の各地の後土が造ったふるさとの山々の頂点に、皇天につながる富士山を置き、皇天のもと皇国の版図の拡大とともに富士の名を冠した山が、周辺地域に広がる、という天皇制神話の植民地支配への適用を意味していた。

天理教の中山みき、大本教の出口なお等、女性が教祖となった新宗教にみられるような、女性原理的性格に、大和言葉は適合しており、庶民に受け入れられやすかった。しかし、志賀のような攻撃的な論旨など男性原理に基づく主張は、知識階級の男性を対象にしたものであり、漢語的用語が適していたのであった。その内容をさらに次節で詳述しよう。

IV-3 「皇天后土」の構造と役割

1. 「皇天后土」的空間認識

猪瀬（1977）は、志賀の『日本風景論』について論じ、「重昂の内的必然性が近代国家形成期の自然性としての膨張志向を反映するものであった」と述べ、その志賀の膨張主義は「垂直と水平の二つのベクトルをもっていた」とする。すなわち、登山という立体的な垂直志向と日本の外側（中国、朝鮮）への水平的な膨張志向とを猪瀬は指しているのである。

猪瀬（1986）は『ミカドの肖像』においても、「『日本風景論』は、富士山を頂点にし、より外側にある中国大陸、朝鮮半島の山々をも傘下に組み込み、同時に高峰を征服し、より高きをきわめるといふ新しいタイプの空間認識にたどりつこうとしていた」という。

しかしながら、その志賀の空間認識を、私は《「皇天后土」という古典的な空間認識を、近代化した日本の天皇と国土、さらにその天皇の軍隊による侵略による版図の拡大にあてはめたもの》であったと考えていることは、前節にも述べた。

志賀が『日本風景論』で扱う「日本」は、「皇天后土」空間認識によって構築されているといえる。志賀の「后土」は、大地であるとともに、その大地に潜む「自然」神であり、例えば出雲の神のような国つ神である。そしてこれは土着の地霊として、それぞれの土地に始原的に存在する点では世界に共通するものであるが、土地によってその働きは異なる。

日本列島の火山の活動は、その列島の「后土」が力を振るったものなのである。しかしながら、大陸の「后土」とは異なり、「天」（皇天）の気を受けて、わが「后土」が美しい火山を列島にあまねく与えてくれた、と志賀が考えたことは、後述する石野雲嶺の漢詩の引用からわかる。

前述の猪瀬（1977）のいう『日本風景論』の膨張主義の「垂直と水平の二つのベクトル」という表現を用いれば、「后土」の造ってくれた山岳に登るという垂直のベクトルと、「皇天」の意を受けて「我皇」が版図を拡げるといふ水平のベクトルとがあるのである。

内田（1986）は、『日本風景論』の中にしばしば現れる「造化」や「大工」（たいこう）という観念は、志賀が札幌農学校で接したキリスト教神学における、神の世界創造説からの影響を反映していないであろうか、と述べる。しかしながら、志賀は日本創造を神話的「皇天后土」創造として描き、それゆえに他国に絶対的に勝る国土を有するとするのである。

志賀が『日本風景論』の巻頭、大槻磐溪の漢詩「江山信美是吾州」に手を加えて、「江山洵美是吾郷」とした¹⁰⁾、その「郷」は country で、その「郷」の神は「后土」なのである。

しかしながら、志賀が『日本風景論』で「日本」もしくは「日本國」という場合は、そういう country 的な日本ではない。nation としての日本

で、それを統べるのは我皇である。猪瀬（1977）は『日本風景論』の日本全体の風土を包括的に捉えようとしたモチーフが、「おらがくにがカントリイ（地方）ではなくネーションであるというナショナルな意識の発生によってもたらされた」（原文の傍点の箇所には下線を付した）ものであるから、日本人に衝撃を与えた、とすでに指摘している。

天の神と天皇との間には、皇祖と皇孫という一体的な関係があり、異民族の住む土地でも、その地が「皇天」によって日本民族に賜与されれば、言い換えれば「皇天」の神意を継承する天皇「我皇」（の軍隊）によって支配することになれば、そこは「日本」になるのである。

このような志賀の二重構造的国土観と対応するものに、彼の民族観がある。志賀は「大和民族」という語の創始者である。彼は「国粹（Nationality）」を「大和民族の間に千古万古より遺伝し来り化醇し来り、つひに当代にいたるまで保存しけるもの」（志賀、1988）と述べた。

この『日本風景論』執筆のころには、彼は日本が他民族支配を進めるときに、被支配地域の民族も「日本国民」となり、やがては「日本民族」に組み込むことを考えていたようである。その際にもととの「日本民族」に当てはまる言葉として、志賀は「大和民族」を考案したのである。すなわち、「大和民族」を中心とし、他民族を束ねたより広い新「日本民族」の形成という考えである。

前述の富士山の名称の語源に関する蝦夷人に対する志賀の記載からも解るように、彼はアイヌ民族を日本人の枠外に置いている。そればかりか、次に琉球の王子も外国人として扱っており、アイヌ人や沖縄の人々などを日本人と区別し、朝鮮、中国、オランダ、英国などの人々と同列に扱っている。北海道や沖縄は、かつては非日本であったが、「皇天」の意によって「日本」に賦与され、大和民族の支配する所となった、と志賀は考えたのであろう。

この問題については、なお検討を要するが、志賀は日本が海外へ発展する（当初、彼はハワイな

どへの移民に強い関心をもっていたが、のちアジア大陸への侵略を構想するようになる) ことに伴う、新しい国土観、民族観を造ろうとしていたことは確かである。

2. 志賀による秋山玉山の漢詩誹謗

さらに志賀のプロパガンダは、「臺灣の最高峰玉山は宛如我が富士山に形似するを以て『臺灣富士』と轉名し、山東省の泰山は『山東富士』と變稱し、齊しく我皇の版圖中に在りて富士山の名稱を冒さしめんことを」とまで飛躍する。

そして文末はこう締めくくっている。

「日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懐の高士は、是に到りて一新改観、先人に超越するの大作傑品を創作せずして可ならんや、何物の拘儒か復た『帝掬崑崙雪。置之扶桑東。突兀五千仞。芙蓉挿碧空』と唱ふ者ぞ、筆を擱くに當りて意氣千秋。」

この漢詩引用の意味や原題、原作者などについては、管見によればこれまで論じられたことはなかった。この五言絶句は「望芙蓉峰」と題し、作者は秋山玉山¹¹⁾であった。玉山を、志賀はなぜ、拘儒、すなわち中華思想にとらわれた偏狭な学者というような意味の蔑称で呼んだのであろうか。志賀は、中国人の精神世界を支配する帝すなわち天帝が崑崙山脈の雪を掬って、それを扶桑(日本)東部に置いた。それが、突兀として五千仞の高さで青空に聳える芙蓉峰(富士山)である、というこの漢詩は許せない、と考えたからである。

先人のそのような作品を超越し「一新改観」せよと志賀は意氣軒昂に読者を叱咤激励した。富士山は中華思想の生み出した天帝なぞが造ったのではない、と志賀は主張する。世界の山々の中心である崑崙山脈から富士山が造られたなどという中華思想的発想を打破し、日本列島の「后土」が「皇天」の気を受けてを造った富士山こそ、世界の山々の標準なのであると志賀は説くのである。

富士山については、志賀は『日本風景論』の中

で、もう一つの漢詩を、こちらは作者名を明記して紹介し、詩意に賛同している。

鍾得秀靈氣。築成東海灣。

天工盡于此。不復出名山。石野雲嶺

《秀靈の気をあつめ得て、東海灣に築き成る。天工はここにおいて尽き、再びは名山出でず。》という表現は、一見、玉山の漢詩と同工異曲に見える。しかしながら、志賀は、雲嶺の「天」は中国の天帝ではなく、日本の「皇天」であると考え、さらに、二度と作られることのない不世出の名山と詠んだ雲嶺に、全面的に賛同しているのである。志賀は富士山は天の秀靈の気をあつめたものであり、決して玉山の詩のような中国崑崙の雪を掬って来たものなどではない、と言っているのである。

志賀が記した「火の女主(フジ)」は「后土」そのものであるが、富士山は「皇天」の気を受けて「后土」が造ったものであると、志賀は表現したかったので、雲嶺の詩をまさに我が意を得たりとして引用しているのである。富士山は、中国の素材を持ってきて中国の天帝が作ったものではなく、日本の「皇天」の靈気を集めて「天」が作ったものとする点が志賀の意に沿ったのである。

石野雲嶺は、秋山玉山よりもほぼ1世紀後、に登場するが、漢詩人としての知名度やその作品の評価においては、江戸期においては玉山に遠く及ばず、また現代においても玉山の「望芙蓉峰」は猪口(1984)や石川(1989)などの書に収められ、前者には江戸期の多くの漢詩人が紹介され、後者には富士山を詠んだ代表的な漢詩が掲げられているが、雲嶺の名や作品は掲げられていない。志賀は漢詩としての文学的評価ではなく、彼の地政学的なメッセージに適合するものを賞賛し、これに背馳するものを批判したのであった。

志賀はさらに、中国の人達が世界の山々の根源、竜脈の中心と考える崑崙の山さえ、日本の影響下に置こうと思っていたらしい。そのことは、先兵として地質学者は亜細亞大陸地質図を造れという

主張をしたあと、こう述べていることから推定される。

「想ふて此所に到れば、西天を睥睨して長呼するもの幾回、誰か吾妻嶽上、濺ぐ所の鮮血を拉してこれを崑崙の山巔に濺ぐ者ぞ」

吾妻山の噴火で殉職した二人の地質学者の遺した精神¹²⁾を、崑崙山脈に遠征して具現せよ、と志賀は言うのである。もはやアジアは中国人の崇敬する天帝の治める世界ではなく、日本の地質学者の命名した用語で説明される所(志賀の本心は、ゆくゆくは日本の皇天の支配する所)、となるべきである、と志賀は豪語しているのである。

中国人は崑崙山は世界の山々の中心であり、氣が生まれ、ここから竜脈が伸びて氣を拡げると考え、かつは大地の中心と考えていた。そこはまた天の中心の真下でもあり、天と地を繋ぐ柱(三本とすることが多い)が立っているものとみていた。

志賀は、崑崙山ではなく富士山こそ世界の山々の中心となるべきもの、天と地を繋ぐもの、と考えたのである。中華思想に基づく崑崙山中心の「皇天后土」的考え方は、長い間、日本の知識人の空間認識となっていたが、志賀はそれを打破し、万邦無比の富士山を中心とする国粹主義的日本的「皇天后土」空間認識を確立しようとしたのである。

前掲の台湾についての記述のあとに、第六版では「兼て期年、山東半島にして我皇の版圖中に納まらんか」云々と述べ、さらに泰山を『『山東富士』と變稱し、齊しく富士山の名称を冒さしめんことを」、という志賀の不遜な記述はよく知られている。しかしながら志賀の胸中には、やがては崑崙富士を…という期待をももっていたのではなからうか。

3. 志賀の「皇天后土」論の役割

猪瀬(1986)は、前記『ミカドの肖像』において、志賀を論じるにあたり、

『日本風景論』の著者志賀重昂の果たした役割を子細に検討しておかねばならない。近代天皇制の相貌を確かめるために。

と書いた。同書において猪瀬は『日本風景論』について多くの重要な指摘をしているが、「后土」や「皇天」については論じていない。

猪瀬は、『日本風景論』がそれまではローカルな存在であった「富士山を日本のシンボルとして措定したところに新しさがあった。」と述べている。富士山を日本を代表するものとしたのは、志賀以前にも多くの例があるので、猪瀬の言はやや言い過ぎではあるが、近代国家としての大日本帝国のシンボルという意味では、そう言えなくもない。猪瀬は、志賀が富士山を中心とした風景秩序によって「一君万民の空間にふさわしいシンボルを体系化した」とする。

しかしながら私は、志賀の描いた空間体系はより複雑で、ローカルな我郷を形成する自然の力「后土」と、我皇の統べるナショナルな国家の政治・軍事・経済の力「皇天」との、二重の構造となつて、その両者を繋ぐものが、ほかならぬ富士山であった、と考えている。志賀の「火山は天地間の『大』なる者」という表現については前に触れたが、その大なるもののなかの最大、最高が富士山であり、天地間を繋ぐのである。

私は、「近代天皇制の相貌を確かめる」には、志賀の新「皇天后土」論に及ぶべきであると考え。すなわち、近代天皇制を支え、発展させ、植民地支配へと導くための感性的なアピールとして、志賀の新「皇天后土」論が生まれたのである。そのアピールは、読者の心に知らず知らずのうちに滲み込んでゆく効果があったと考えられる。

志賀が、「日本の版圖」と書かずに「我皇の版圖」と書いたことは、単なる言い換えではない。「我皇の版圖」となることによって「日本の風景」の中に入る、すなわち「皇天」がさらに日本の国土を拡げるのである。

「我皇の版圖」の拡大は「皇天」の神意に適う

ものであるから、「皇軍」には天佑神助があり、大日本帝国は膨張するのである¹³⁾。

大室(2003)は、志賀が日本に劣るとした支那の風景を、帝国の領土にしたら、「日本風景の全体からみれば、劣等なものが加えられることによって、その分だけ優秀性が稀釈されてしまうのが道理であろう。このことに思い及ばなかったのは、志賀の思考のいたらなさであった。」と指摘している。

大室の指摘とは異なり、私は、志賀が「このことに思い及」んでいて、と考えている。この新「皇天后土」論が、「このこと」を強引に人々に納得させようとした志賀のレトリックを如実に示している。すなわち、「后土」は、日本列島を中心とした志賀のいう「島帝国」(この場合、志賀は千島列島や西南諸島、伊豆諸島などを含めて考えている)を造り、そこは「后土」によって美しい火山列島になっているのである。台湾は島であり、この「島帝国」が拡大するに相応しいと志賀は感じていたのである。

一方、志賀が考えるアジア大陸は、我らとは異なる「后土」が、「后土冥々」という索漠荒涼とした風景を造るのみであったが、それでもそれらの地には名山と称する非火山があった。大陸が「皇天」の率いる軍によって版図となった場合、その地の名山を富士山を頂点とする支配体制に組み込み、〇〇富士と改称させよう、と志賀は提案する。

この「皇天」と「后土」を繋いで考察すると、志賀は次のように言っていることになる。富士山をはじめ「后土」が造った豊富な火山は、我郷日本列島の風景を洵美なものとした、と志賀は説き、そのような日本風景の質の高さをまず強調する。そして風景の劣るとした大陸へ「皇天」の現世の姿である我皇が版図を拡げ、日本の領土の面的すなわち量的拡大を進めることを志賀は唱える。だが、この二点は論理的には繋がり難い。それを一見、矛盾しないように見せているのが名山の標準とした「富士山」である。志賀は、少なくとも富士山は「皇天」の気を受けて「后土」が造ったも

のとした、のである。

名山は火山、その火山が多い日本、日本の火山のなかの名山は富士山、したがって(という点に飛躍があるが)富士山は全世界の名山の標準、と志賀は尻取りのような論を展開し、海外の我皇の支配域を拡げ、各地の名山を〇〇富士とせよと主張する¹⁴⁾のである。

「皇天」の気を受け「后土」が火山力を発揮して造った富士山は、「富士、實は全世界『名山』の標準」と認定することを通して、志賀は海外の風景秩序を測る標準としようとした。志賀の言説は、質的に高い風景を持つ日本が、質的に低い風景しか持たない大陸諸地域に富士山の名を広めてゆくことで、あたかも海外の風景を日本の風景の支配下におくことができるような錯覚を人々に与え、領土の量的拡大すなわち侵略を正当化できるような幻想を国民に与えたのである。

志賀が次のように述べると、その文脈は論理的とはいえないものの、畳み掛けるような調子に、読者はなんとなく納得したような気持ちになったのであろう。

《日本は風景が優れている》

《それは我が「后土」が火山を多く造ったからである》

《なかでも富士山は最も優れている名山である》

《海外、特に近隣諸国は火山が無いので風景が劣っている》

《「皇天」の賦与により、「我皇」はいまやこれらの地域にも版図を拡げつつある》

《風景の優れた日本の富士山をこれらの新版図の山々の基準にしよう》

《その地域の中心的な山に〇〇富士の名を与えよう》

かくして「后土」が造った富士山を、志賀は「皇天」の神意をうけ海外に「日本帝国」の領土ないし勢力圏を拡大する際の「基準」とし、「我皇」のもと、大陸へ侵攻しようと国民に呼びかけ、

「地名による侵略」(米地、1996b)を具現化しようとしたのである。

巻末直前の「日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懐の高士に寄語す」と「亜細亞大陸地質の研鑽日本の地學家に寄語す」という二つの章は、「寄語」すなわち提言として、前者は文系、後者は理系、つまりは広く知識人たちへの呼びかけでもあり、読者は自分への言葉と受け取ったであろう。その二つの「寄語」こそは、泰山に富士山の名を与えよ、アジアの岩石系統の名に日本の秩父などの名を用いよ、さらには崑崙の山巔に日本人科学者の鮮血をそそげ、と力説し、アジア大陸への言語的侵略、文化的侵略を扇動した過激なプロパガンダなのであった。

おわりに

『日本風景論』を通読した読者は、志賀の巧妙な構成と操作とレトリックによって、「后土」が与えてくれた火山の多い優れた風景を持つ日本が、「皇天」の神意を継ぐ「我皇」に率いられ、火山の少ない土地を侵略し支配することを、あたかも正当化できるかのような幻想を抱かされ、アジア大陸への知的(と思われる)侵略に勇躍して加わろうという心情をかき立てられたのである。それが日清戦争から日露戦争に至る時期の日本人に、熱烈に『日本風景論』が読まれた所以なのであった。

『日本風景論』の内容のなかで、山岳に関する記事が圧倒的に多いことに読者が違和感をあまり感じなかったのは、日本人の心のなかに山を崇敬し、国つ神(后土)や祖霊が宿るといった観念が浸透していたからではないだろうか。そこに天つ神(皇天)のもと富士山を中心とした国土意識を結び付けた志賀の国粹主義が、近代日本初の大規模な対外戦争に直面した国民に熱狂的に受け入れられたのであろう。

謝辞 査読者の方々から、多くの有益なご教示、ご指摘をいただいた。記して感謝申し上げます。

注

- 1) この『日本風景論』の全体像については、米地(1996b)を参照されたい。この論考は、『日本風景論』のキマイラ的な寄せ集めの構成や、この書がアジア大陸への侮りと野心とを日本人に植え付けたこと、などを指摘している。
- 2) 火山の記載に際して、火山岩からなるが火山とは言い難いものも志賀はあまり区別しないで扱っている。取り上げ方に厳密さを欠くのは、当時の学界にもその傾向はあったが、志賀の大雑把と称される性格も影響している。
- 3) 名和長年は鎌倉時代末～南北朝期の勤王の武士として知られ、1333年、隠岐島に流されていた後醍醐天皇を救出し、船上山で帝を奉じて挙兵し、建武の新政に貢献したが、足利尊氏の離反に対抗して、1936年戦死した。
- 4) 三瓶山の三峰は、現在では外輪山が解体したのではなく、溶岩円頂丘の解体したもの(鈴木、1968)と考えられている。
- 5) 火山脈という語は今は用いず、火山帯という。なお、志賀の記載した火山脈については、米地(2003)において取り上げた。
- 6) 志賀の説明は、英国艦隊を撃退したと思わせる説明であるが、薩摩側の砲台は全て壊滅し、城下も焼かれた。英国艦隊は60名あまりの死傷者を出したが失った艦はなかった。
- 7) 千田(1999)は、高千穂について詳細に論じ、その比定地としては宮崎県西臼杵郡高千穂すなわち阿蘇山域の東南部に想定するものと、鹿児島・宮崎県境の高千穂峰すなわち霧島山域の一部に想定するものとの有力な二説があるが、千田は後者を採っている。
- 8) なお、志賀は明記していないが富士アイヌ語説はバチェラーによるもので、おそらく『地学雑誌』に載った雑報中の一文(無署名、1890)あたりに拠って書いたと思われる。
- 9) 1887(明治20)年に志賀が書いた『南洋時事』においては「嗚呼不ニノ嶽大瀛ノ水、美ナル邦土哉。上帝豈ニ偶然ニコレヲ日本人民ニ賦與センヤ」と書いており、このほか、志賀が三河新聞主筆であった1889(明治22)年、同社刊行の新聞『みかは』に自ら寄せた漢詩「三河男児歌」(宇井、1991による)にも、「呼嗟上帝之眼不朦朧」など、この「上帝」の語を用いている。
- 10) 『日本風景論』巻頭の「江山洵美是吾郷」の語句は、初版では作者名がなく、のちの版で括弧して大槻磐溪と記された。この句に関しては、山本・上田

- (1997)、大室(2003)、米地(2003)が論じている。
- 11) 秋山玉山(1702-1763)は江戸時代中期の著名な漢詩人である。しかし侮蔑的に扱うため、志賀は敢えてその名を挙げていない。山本・上田(1997)は『日本風景論』に引用されている29人の作家・漢詩人の名を挙げ略伝を付しているが、玉山の名は無く、「望芙蓉峰」という題名にも言及していない。
- 12) 二人の殉職を、日清戦争における兵士の戦死になぞらえたものである。
- 13) 1945年の敗戦まで、日本はこのような天皇観をもっていた。例えば1941年のいわゆる宣戦の詔勅には、「天佑ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝国天皇ハ…」と始まり、「朕カ陸海軍將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ従事シ…」とある。皇統を受け継ぎ、天の助けを受けている天皇が、天皇の軍隊(皇軍)に交戦を命じたのであった。
- 14) 中国東北地方を満州国とし、日本から渡った開拓団が、それぞれの土地の山に〇〇富士の名を付けていたのは、このような発想の延長上にある(米地、1996a)。

文 献

- 荒山正彦(1989): 明治期における風景の受容 - 『日本風景論』と山岳会 - . 人文地理. 41. 551-564.
- 石川忠久(1989): 漢詩の風景. 大修館書店.
- 猪口篤司(1984): 日本漢文学史. 角川書店.
- 猪瀬直樹(1977): 評伝・志賀重昂と『日本風景論』. 志賀富士男ほか著: 『日本風景論』解説. 鳳出版. 29-117.
- 猪瀬直樹(1986): ミカドの肖像. 小学館.
- 宇井邦夫(1991): 志賀重昂 人と足跡. 現代フォルム.
- 上田正昭(2001): 日本の原像国つ神のいのち. 創元社. (初形, 1970, 文芸春秋社)
- 内田芳明(1986): 地理学考と風景の現象学 志賀重昂『日本風景論』と内村鑑三『地人論』. 歴史と社会. 7. 96-115.
- 大室幹雄(2003): 志賀重昂『日本風景論』精読. 岩波現代文庫.
- 河村正之(2001): 山書散策 - 埋もれていた山の名著を発掘する. 東京新聞出版局.
- 菊池 安(1889): 鹽原地相一斑. 地学雑誌. 1. 566-571.
- 黒沼 健(1979): 登山の黎明. ぺりかん社.
- 黒沼 健(1991): フランシス・ガルトン「旅行術」と『日本風景論』. 日本古書通信. 56(8). 1.
- 小島烏水(1936): アルピニストの手記. 書物展望社. (平凡社ライブラリー版. 1996.)
- 近藤信行(1992): 解説. 小島烏水「日本アルプス」. 岩波文庫. 423-444.
- 近藤信行(1995): 解説. 志賀重昂『日本風景論』. 岩波文庫. 383-395.
- 三田博雄(1973): 山の思想史. 岩波書店.
- Satow, E. M. & A. G. S. Hawes (1884): Handbook for Travellers in Central & Northern Japan 2nd Ed. John Murray. London.
- サトウ, E. 編著, 庄田元男訳(1996): 明治日本旅行案内(下巻) ルート編Ⅱ. 平凡社.
- 佐藤能丸(1998): 明治ナショナリズムの研究 - 政教社の成立とその周辺 -. 芙蓉書房出版.
- 志賀重昂(1887): 南洋時事. 丸善.
- 志賀重昂(1888): 日本人が懐抱する処の旨義を告白す. 日本人. 2. 3-6.
- 志賀重昂(1894): 日本風景論初版. 政教社. (復刻版 日本山岳名著 1975, 大修館書店)
- ほかに次の各版を参照した。6版. 政教社(1896)、9版. 政教社(1898)、15版. 博文館(1903)、志賀重昂全集4巻所収. 同刊行会. 1-194. (1928)、岩波文庫版(1937)、講談社学術文庫版. 上. 下. (1976)、政教社文学集. 明治文学全集37巻所収. 筑摩書房. 3-97. (1980)、岩波文庫新版(1995)。
- 昭和女子大学近代文学研究室(1967): 志賀重昂. 近代文学研究叢書26巻. 143-213.
- 鈴木 敏(1889): 九州の一大噴火山. 地学雑誌. 1. 125-132.
- 鈴木貞美(1995): 日本近代文学に見る自然観 - その変遷の概要 -. 伊東俊太郎編『日本人の自然観』. 河出書房新社. 371-394.
- 鈴木隆介(1968): 地理学評論. 41. 386-387.
- 神保小虎(1891): 北海道の火山. 地学雑誌. 3-26. 57-61.
- 千田 稔(1999): 高千穂幻想「国家」を背負った風景. PHP研究所.
- 中島謙造(1892): 九州の霧島山. 地学雑誌. 4-40. 151-155.
- 土方定一(1976): 解説. 志賀重昂『日本風景論(下)』. 講談社学術文庫. 178-188.
- Milne, J. (1886): The volcanoes of Japan. Trans. Seismol. Soc. Japan 10. 1-184.
- 山本教彦・上田誉志美(1997): 風景の成立 - 志賀重昂と『日本風景論』. 海風社.
- 横山壮次郎(1894): 千島巡検記. 地学雑誌. 6-63. 152-158.
- 米地文夫(1989): J. ミルンの地理学, 特に地形学における史的意義 - 志賀重昂とのかかわりを中心に -. 日本地理学会予稿集. 35. 284-285.
- 米地文夫(1990): 志賀重昂『日本風景論』の分析 - 火

- 山に関する剽窃と国粹主義の関係－. 日本地理学会予稿集. 38. 46-47.
- 米地文夫 (1996a): 山の名に地政学はなじまない－地名による侵略: 「日本風景論」から「大地の子」まで－. 季刊地理学. 48. 188-191.
- 米地文夫 (1996b): 志賀重昂『日本風景論』のキマイラの性格とその景観認識. 岩手大学教育学部研究年報. 56-1. 15-34.
- 米地文夫 (1999): 北日本の火山に関する志賀重昂『日本風景論』の記載－剽窃とその背景としての政治的意図－. 総合政策. 1. 477-488.
- 米地文夫 (2000): 志賀重昂『日本風景論』の政治的意図と菊池安論文との関係－東日本および小笠原諸島の火山記載をめぐって－. 総合政策. 2. 123-133.
- 米地文夫 (2001): 志賀重昂は火口湖をどのような景観として捉えたか－『日本風景論』の政治的メタファーを探る－. 季刊地理学. 53. 111-126.
- 米地文夫 (2003): 志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心－中部日本の火山等に関する記載をめぐって－. 総合政策. 5. 349-367.
- 米地文夫 (未発表): 志賀重昂『日本風景論』における富士山の記述. 地理学評論. (投稿予定)
- 米地文夫・中嶋文雄 (未発表): 志賀重昂『日本風景論』の地形形態の記載における数学的誤謬. 形の科学会誌. (投稿予定)
- 脇水鐵五郎 (1892): 浅間山の記. 地学雑誌. 4-38. 55-61.
- 無署名 (1890): 富士の稱呼. 地学雑誌. 2-13. 34.

(2003年12月19日原稿提出)

(2004年2月13日受理)

The Theory of Kohten (Providence) and Kohdo (Terra) in Shigetaka Shiga's "Nihon Fukeiron"

- Descriptions on Volcanoes in Southwestern Japan and Supplement on Taiwan -

Fumio YONECHI

Abstract This paper reveals that descriptions by Shigetaka Shiga in his *Nihon Fukeiron*, published in 1894, on volcanoes in Southwestern Japan contain a great deal that he plagiarized from other articles, just as he did for his descriptions on volcanoes in other districts of Japan, and that those descriptions deal more with historical and religious aspects compared with those on other districts.

Shiga writes "The domain of our Emperor now extends to Taiwan" in its later version published after Japan's occupation of Taiwan (1885) and theorizes that the landscape is created by "kohdo," or volcanic force, and that our Emperor, who was given "kohten" or providence, has the right to reign over the island, thereby justifying the expansion of domination by invasion of the Imperial army.

Key words Shigetaka Shiga's *Nihon Fukeiron*, volcano, kohten, kohdo, southwestern Japan, Taiwan